

## 土左日記（とさにっき）

平安中期、935年(承平5)ころ成立の作品。作者は紀貫之。934年12月21日、新任の国司島田公鑿に国司の館を明け渡して大津に移った前土佐守紀貫之は、27日大津を出帆し、鹿児島(かのさき)、浦戸、大湊、奈半(なは)、室津、津呂、野根、日和佐(ひわさ)、答島(こたじま)、土佐泊、多奈川、貝塚、難波、曲(わた)、鳥飼、鶴殿、山崎と、船路の泊りを重ね、翌年2月16日ようやく京のわが家へ帰り着いた。その間の知人交友との離別の事情、各地の風光や船中のできごと、または港々でのエピソード、水夫たちの船唄などを克明に日記しておいたのであろう。それは当然、真名(まな)の漢文日記であったと思われるが、土佐在国中に醍醐天皇をはじめ右大臣藤原定方、権中納言藤原兼輔ら有力な後継者をすべて失った貫之としては、大家族を扶養してゆくためには、権力者太政大臣藤原忠平父子に接近して官職を得なければならなかった。その就職請願の申文(もうしづみ)ともいうべきものが、このかな書き和文の《土左日記》であった。素材を旅の体験に取り、様式を日次(ひなみ)の記としてはいるが、単純な意味での日記紀行ではない。それは事実をはなはだしく臆化した虚構を加えているからである。作者を女性に仮託してかな文を用いたのは、土佐で失った女兒を追慕するみずからの悲しみを見つめた自己観照の文学とするためであり、軽快な諧謔をまじえて一般国司の腐敗墮落や交通業者の不正行為を痛烈に風刺し、みずからの廉直清貧を主張するのは、権力者への訴えを兼ねた社会批判の書とするためである。老若男女さまざまな性格の人物を登場させた戯曲的構成のもとに、貫之が生涯を通じて追求し続けた高度の歌論をかみ砕いて具体的にわかりやすく楽しく説き明かすのは、権力者の子弟たる初心入門の年少者の教科書とするためであったと思われる。押鮎と鱧(なよし)の頭との恋を空想する童話性、船と並行して山も進むかに見える錯視を取り上げた動画的描写、幼児の感覚で思考するこの老歌人の感受性の柔軟さ、しかも緩急自在な文章のリズムに読者をひきこんでゆく技巧の達者なことは驚嘆に値する。歌論、風刺、自照と三つの主題をあやなしてゆくなかに、先祖の船守や敬愛する兼輔への鎮魂の文章をすら気づかれぬようにそっと忍ばせておく根性のしたたかさ、この掌編からくみ取られる効果のおそろべき多様さは、この作品が以後の日本文学の歴史に、日記文学、私小説、歌論書等の出発点となったことを認めただけではもの足りぬほどである。

萩谷 朴 (c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha, All rights reserved.

紀貫之(きのつらゆき) 868(貞観 10)年頃 ~ 945(天慶 8)年

平安前期の歌人、文学者、官人。貫之5代の祖、贈右大臣船守(ふなもり)は、桓武天皇の革新政策をたずけて平安遷都に力を尽くした偉材であったし、祖父本道の従弟有常は在原業平とともに文徳天皇第1皇子惟喬(これたか)親王を擁して、北家藤原氏と皇位継承権を争ったほどの輝かしい歴史をもっていた紀氏であったが、貫之の時代には完全に摂関藤原氏の勢力に圧倒されて、政界の表面から影をひそめていた。おそらく父望行(もちゆき)を早く失った貫之は、有常あたりから家系の誇りを教えられて成長した。たまたま宇多天皇が菅原道真を重く用いて摂関抑圧の方針を打ち出し、和歌を奨励して朝威の振興を計ろうとしたとき、青年貫之は時流に乗じて家運の再興を夢見たであろう。やがて897年(寛平9)に宇多天皇が退位し、901年(延喜1)に道真が失脚するとその望みも消えたが、醍醐天皇が《古今和歌集》の撰進を命じ、従兄の友則とともに撰者となるにおよんで、和歌の世界に名を挙げる新たな希望が貫之の胸に湧いた。和漢の教養と楽舞の才能を身につけ、誠実努力の人であった貫之は、《古今集》の編纂を通じて歌壇の第一人者の地位にのぼり詰めた。

しかし官界にあってはまったくの不遇で、延喜年間(901-923)の末年に至っても、相変わらず内御書所預(うちのおんふみのところのあずかり)として、図書の整理や歌集の編纂を本務とし、大内記・美濃介・左京亮などの官職は、俸給を増すための兼官に過ぎなかったから、位階の昇進は極端に遅れていた。930年(延長8)に土佐守に任じられたことが行政官吏として実務に就いた最初であったかもしれない。それだけに貫之は清廉謹直に国司としての職責を果たしたが、その間、醍醐天皇をはじめ右大臣藤原定方、権中納言藤原兼輔など、貫之の後ろだてとなっていた有力者が相ついでこの世を去り、935年(承平5)任終わって帰京したとき、政官界において貫之は孤立無援であった。当時の大家族を扶養するためには権力者に接近して官職を求めねばならない。国司として常識となっていた不正の蓄財をいっさい避けていた貫之としては、和歌の学識をもって権力者の知己を求めるとはほかに道はない。そこで創作したのが《土左日記》である。和歌初学入門の年少者のためにはおもしろくてためになる手引きの歌論書、また当時の国司の腐敗堕落や交通業者の不正手段を諧謔を交えて痛烈に風刺する一方、貫之自身の精励さや清貧を印象づけ、ひそかに亡児を悲嘆し老境を嘆き父祖の栄光を偲ぶ日本最初の文学作品としての日記がこれであった。やがてその効果は現れて太政大臣藤原忠平父子の庇護を受け943年(天慶6)推定76歳にしてようやく従五位上に昇進したが、従五位下に叙せられてからすでに26年を経ている。貫之がいかに不遇であったかが知られよう。945年9月、木工権頭(もくのごんのかみ)をもって卒した。その作品は上記の他に《新撰和歌》《自撰家集》《万葉五卷抄》《大堰川行幸和歌序》《貫之宅歌合》などがあり、勅撰に入集する和歌451首、他撰本《貫之集》その他を併せて総数1069首の和歌が残されている。

貫之にはその誠実な人柄から、伝説はきわめて少ない。勅許を得て和泉の国に創建した船守神社から帰京の途中、蟻通し明神の祟りを受けて馬がたおれたときに和歌を奉納した逸話(《袋草紙》、謡曲《蟻通》など)、藤原公任が具平親王と人麻呂・貫之の優劣を論争したこと(《袋草紙》)、順徳院が《八雲御抄》に「貫之さしもなしなどいふ事少々聞ゆ。歌の魔の第一也」と記していること、近代になって桂園派の観念的な歌風を打破しようとした正岡子規が、和歌の即興性を重んじた貫之を理解しえずして《歌よみに与ふる書》で「貫之は下手な歌よみにて、古今集はくだらぬ集に有之候」と極論したように、歌人としての貫之の評価にかかわるものばかりであった。

萩谷 朴 (c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha, All rights reserved.

## 日記文学（につきぶんがく）

日記文学は世界文学のなかでも日本独自の文学ジャンルといってよい。《土左日記》からはじまり、王朝女流日記を頻出させ、松尾芭蕉、小林一茶らを経て、正岡子規の《仰臥漫録(ぎようがまんろく)》等に至るこのジャンルは、近代に入って純粋な意味でのジャンル性を保たなくなるものの、夏目漱石、森宝外、誇口一葉、石川啄木、永井荷風さらには高見順等々の作家によるおびただしい作品を生み出している。さらに近代文学における私小説も射程距離内に含めるならば、日記文学は日本文学独自の一大潮流だといえよう。しかし、そうした広大な俯瞰のうえで、さらに厳密化すると、日記文学という文学性が認められるのは、古代後期と中世に現れる女流文学者による仮名日記に限定することができる。

自照文学とか私小説(イッヒロマン)などともいわれるこれらの日記文学は、仮名で書かれた回想の文学という共通の要素があり、それが単なる備忘録的な日記を超克していくのである。回想の文学は体験と回想と書くことという三つの時間が錯綜するところに特色があり、あくまでも体験に依拠したとしても、回想の中でそれは変奏され、書くことを通じて昇華されることになる。たとえば、935年(承平5)ごろ成ったとされる日記文学の嚆矢(こうし)、紀貫之の《土左日記》は男もすなる日記といふものを、女もしてみんとてするなりと書きはじめられ、侍女らしき女性に仮託して書かれているのだが、亡娘に言及するにしたがって作者自身の感慨が露呈されてくるように、日記文学はその錯綜性に文学が宿されている。続く藤原道綱母の21年に及ぶ自伝的回想である《蜻蛉(かげろう)日記》(10世紀後半)も同様で、あくまでも自己体験を叙述したにもかかわらず、冒頭の跋文でさてもありぬべきことなん、多かりけると漏らしてしまうのであって、回想や書くことが体験を錯綜させ、虚構化していく様相が示唆されているといえよう。この藤原兼家との夫婦生活の不安や破綻の苦悶を描いた作品に続いて、敦道親王との情緒的な恋愛を贈答歌を軸に描いた《和泉式部日記》、宮廷生活の中で鋭敏に自己を凝視する《紫式部日記》、物語に魅惑された少女が夢多き成長を遂げつつ、宗教性にめざめるに至る40年間を自叙した菅原孝標女の《更級日記》がそうした日記文学の代表作品としてあるが、この後に現れる作品は日記文学が抱えていた回想の緊張性が弛緩(しかん)してしまう傾向がみられる。院政期の、母性愛を描いた《成尋阿闍梨母集(じようじんあじやりははのしゆう)》や堀河天皇の死を軸に描いた《讃岐典侍(さぬきのすけ)日記》がそれだが、《建礼門院右京大夫集》《十六夜日記》《弁内侍日記》《中務内侍日記》など、鎌倉時代に至ってもこの女流日記の伝統は続き、とくに後深草院二条の《問はず語り》は注目される作品である。なお、鎌倉期には《飛鳥井雅有日記》や《家長日記》のように男性による仮名日記も書かれている。

三谷 邦明 (c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha, All rights reserved.